



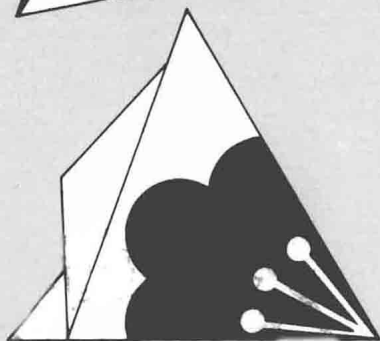
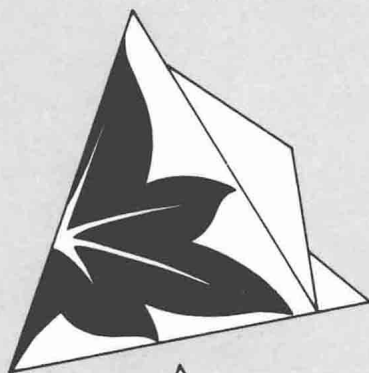
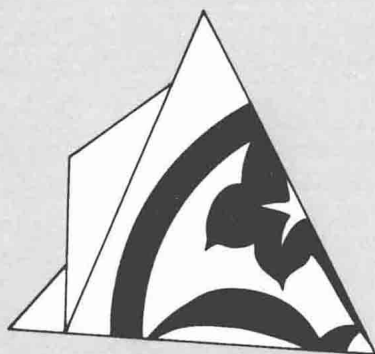
花小説・戯曲選



第六卷



岩波書店



鏡花小説・戯曲選 第六卷

第二回配本(全十二卷)

一九八一年七月二四日 第一刷発行
一九八二年四月一〇日 第二刷発行

定価三〇〇〇円

著者 泉鏡太郎

発行者 緑川亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
緑岩波書店

電話 〇三二六五四二一
振替東京六二六三四〇

印刷・三陽社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

目 次

草迷宮	一
沼夫人	一七
朱日記	二五
陽炎座	二七
第二菟蕪本	三六
眉かくしの靈	四三
解 說	寺田 透 四七五

草 迷 宮

向うの小澤に蛇が立つて、

八幡長者の、をと娘、

よくも立つたり、巧んだり。

手には二本の珠を持ち、

足には黄金の靴を穿き、

あゝよべ、かうよべと云ひながら、

山くれ野くれ行つたれば……

一

三浦の大崩壊を、魔所だといふ。

葉山一帯の海岸を屏風で劃つた、櫻山の裾が、見も馴れぬ獣の如く、洋へ躍込んだ、一方は長者園の濱で、逗子から森戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の时分、人死のあるのは、此の邊では此處が多い。

「夏激い暑さに、雲の峰も焼いた霞のやうに小さく焦げて、ぱち／＼と音がして、火の粉になつて覆れさうな日盛に、是から湧いて出て人間に成らうと思はれる裸體の男女が、入交りに波に浮んで居ると、赫とたゞ金銀銅鐵、眞白に溶けた膏の、何處に龜裂が入つたか、破鐘のやうなる聲して、

「泳ぐもの、歸れ。」と叫んだ。

此の呪詛のために、浮べる輩はぶくりと沈んで、四邊は白泡となつたと聞く。

又十七ばかり少年の、肋膜炎を病んだ擧句が、保養にとて來て居たが、可恐く身體を氣にして、自分で病理學まで研究して、〇、などと調合する、朝夕檢溫氣で度を料る、三度の食事も度量衡で食べるのが、秋の暮方、誰も居ない浪打際を、生白い瘦脛の高端折、跣足でちよび／＼横歩きで、日課の如き運動をしながら、つく／＼不平らしく、海に向つて、高慢な舌打して、

「あゝ、退屈だ。」

と呟くと、頭上の崖の洞中から、異聲を放つて、

「親孝行でもしろ——」と喚いた。

爲に、其の少年は太く煩ひ附いたと云ふ。

そんなこんなで、其處が魔所だの風説は、近頃一層甚しくなつて、知らずに大崩壊へ上るの

を、土地の者が見着けると、百姓は鍼を杖支き、船頭は舳に立つて、下りろ、危い、と聲を懸ける。實際魔所でなくとも、大崩壊の絶頂は藥研を俯向けに伏せたやうで、跨ぐと鐙の無いばかり。馬の背に立つ巖、狭く鋭く、踵から、爪先から、すかり中窪に削つた斷崖の、見下ろす麓の白浪に、揺落さるゝ思がある。

さて一方は長者園の渚へは、浦の波が、靜に展いて、忙しく然も長閑に、鶏の羽たゞく音がするのに、唯切立ての巖一枚、一方は太平洋の大濤が、牛の吼ゆるが如き聲して、緩かに然も凄じく、うゝ、おゝ、と呻つて、三崎街道の外濱に大畝りを打つのである。

右から左へ、僅に瞳を動かすさへ、杜若咲く八ツ橋と、月の武藏野ほどに趣が激變して、浦には白帆の鷗が舞ひ、沖を黒煙の龍が奔る。

是だけでも眩くばかりなるに、蹈む足許は、岩の其の劍の刃を渡るやう。取纏る松の枝の、海を分けて、種々の波の調べの懸るのも、人が縋れば根が揺れて、攀上つた喘ぎも留まぬに、汗を冷うする風が絶えぬ。

然ればとて、是がために其の景勝を傷けてはならぬ。大崩壊の巖の膚は、春は紫に、夏は緑、秋紅に、冬は黄に、藤を編み、蔦を絡ひ、鼓子花も咲き、龍膽も咲き、尾花が磨けば月も射す。いで、紺青の波を蹈んで、水天の間に絲の如き大島山に飛ばんす姿。巨匠が鑿を施した、青銅の

獅子の倂あり。其の美しき花の衣は、彼が威靈を稱へたる牡丹花の飾に似て、根に寄る潮の玉を砕くは、日に黄金、月に白銀、或は怒り、或は殺す、鋭き大自在の爪かと思ゆる。

二

修業中の小次郎法師が、諸國一見の途次、相州三崎まはりをして、秋谷の海岸を通つた時の事である。

件の大崩壊の海に突出でた、獅子王の腹を、太平洋の方から一町ばかり前途に見渡す、街道端の——直ぐ崖の下へ白浪が打寄せる——江の島と富士とを、簾に透かして描いたやうな、一寸した葭簀張の茶店に休むと、媼が口の長い鐵葉の湯沸から、澁茶を注いで、人皇何代の御時かの箱根細工の木地盆に、装溢れるばかりなのを差出した。

床凡の在處も狭いから、今注いだので、引傾いた、湯沸の口を吹出す湯氣は、むら／＼と、法師の胸に靡いたが、其さへ颯と涼しい風で、冷い霧のかゝるやうな、法衣の袖は葭簀を擦つて、外の小松へ翻る。

爽な心持に、道中の里程を書いた、名古屋扇も開くに不及、疊んだなり、肩をはづした振分けの小さな荷物の、白木綿の繋ぎめを、押遣つて、

「千兩」とがぶりと呑み、

「あゝ、旨い、是は結構。」と莞爾して、

「おいしい序に、何と、其も甘さうだね、二ツ三ツ取つて下さい。」

「はい、此の團子でござりますか。是は貴方、田舎出来で、澤山甘くはござりませぬが、其のかはり、皮も餡子も、小米と小豆の生一本でござります。」

と小さな丸鬚を、ほく／＼もの、折敷の上へ小綺麗に取つてくれる。

扇子だけ床几に置いて、蒔茶茶碗を持つたまゝ、一ツ撮まうとした時であつた。

「ヒイ、ヒイヒイ！」と唐突に奇聲を放つた、濁聲の蜩一匹。

法師が入つた口とは對向ひ、大崩壞の方の床几のはづれに、竹柱に留まつて前刻から——胸を
はだけた、手織縞の汚れた單衣に、弛んだ帶、煮染めたやうな手拭をわがねた首から、頸へかけ
て、耳を蔽ふまで髪伸びた、色の黒い、巖乗造りの、身の丈抜群なる和郎一人。目の光の晃々
と冴えたに似ず、あんぐりと口を開けて、厚い下唇を垂れたのが、別に見るものもない茶店の世
帯を、きよろ／＼と胸して居たのがあつて——お百姓に、船頭殿は稼ぎ時、土方人足も働き盛り、
日脚の八ツさがりを其の體は、いづれ界限の怠惰ものと見たばかり。小次郎法師は、別に心にも
留めなかつたが、不意の笑聲に一驚を吃して、和郎の顔と、折敷の團子を見較べた。

「串戲ではない、お婆さん、お前は見懸けに寄らぬ馴輕ものだね。」

「何でござりますえ。」

「否さ、此の團子は、こりや泥か埴土で製へたのぢやないのかい。」

「滅相なことをおつしやりまし。」

と年寄は眞顔に成り、見上げ皺を澤山寄せて、

「何を貴方、勿體もない。私もはい法然様拜みますものでござります。奇齋坊の柿の種が、小粒

小粒になればと云うて、御出家に土の團子を差上げまして済むものでござりますかよ。」

眞正直に言譯されて、小次郎法師は些と氣の毒。

「何々、然う眞に受けられては困ります。此の涼しさに元氣ついて、半分は元戲だが、旅をすれ

ば色々の事がある。駿州の阿部川餅は、そつくり正のものに木で拵へたのを、盆にのせて、看板

に出してあると云ひます。今これを食べようとするのを見て其の人が、」

と其方を見た、和郎はきよとんと仰向いて、烏も居らぬに何ぢややら、頻に空を仰いでござる。

「唐突に笑ふから、はゝあ、此の團子も看板を取違へたのかと思つたんだよ。」

「えゝ、えゝ、否、お前様、」

と小薩張した前かけの膝を拍き、近寄つて聲を密め、

「これは、もし氣ちがひでござりますよ。はい。」
と云つて、獨りで媼は頷いた。問はせ給はば、其の仔細の儀は承知の趣。

三

小次郎法師は、掛茶屋の庇から、天へ蝙蝠を吹出しさうに仰向いた、和郎の面を斜に見遣つて、
「然う、氣違ひかい。私は又啞でもあらうかと思つた、立派な若い人が氣の毒な。」

「お前様ね、一ツは心柄でござりますよ。」
媼は、罪と報を、且つ悟り且つあきらめたやうなものいひ。

「何か憑物でもしたと云ふのか、暮し向きの屈託とでも云ふ事か。」

と言ひ懸けて、澁茶に又舌打しながら、圓い茶の子を口の端へ持つて行くと、然あらぬ方を見
て居ながら天眼通でもある事か、逸疾くぎろりと見附けて、

「やあ、石を嚙りやあがる。」

小次郎再び化轉して、

「あんな事を云ふよ、お婆さん。」

「悪い餓鬼ぢや。嘉吉や、主あ、最う彼方へ行かつしやいよ。」

其の本體は却つて差措き、砂地に這つた、朦朧とした影に向つて、窘めるやうに言つた。

潮は光るが、空は折から薄曇りである。

法師も是あるがために暗いやうな、和郎の影法師を伏目に見て、

「一ツ分けて遣りませうかね。團子が欲しいのかも知れん、其だと思ひが可恐しい。眞個に石にでもなると大變。」

「食氣の狂人ではござりませんに、御無用になさりまし。

石ぢや、と申しましたのは、是でも幾干か、不斷の事を、覺えて居ると見えまして、私が何時でもお客様に差上げますのを知つて居りまして、今のやうに云うたのでござりましょ。

又埴土の團子ぢや、とおつしやつてはなりません。此のお前様。」

と、法師の脱いで立てかけた、檜笠を兩手に据ゑて、荷物の上へ直す序に、目で教へたる腹贅の外。

さつくと削つた荒造の仁王尊が、引組む狀の巖續き、海を踏んで突立つ間に、倒に生えかゝつた竹藪を一叢隔てて、同じ巖の六枚屏風、月には蒼き佛立たう——ちらほらと松も見えて、いろいろの浪を鹹した、鍔の袖を激に翳す。

「あれを貴下、お通りがかりに、御覽じはなさりませんか。」

と背向きになつて小腰を屈め、蛇は七輪の炭をがさ／＼と火箸で直すと、藥罐の尻が合點で、丁と据わる。

「何の道貫下には御用はござりますまいなれど、大崩壞の突端と睨み合ひに、出張つて居りますあの巖を、」

と立直つて指をさしたが、片手は据ゑ腰を、えいさ、と抱きつゝ、

「あれ、あれでござります。」

波が寄せて、恰も風鈴が碎けた形に、ばら／＼と其の巖端に打かゝる。

「あの、岩一枚、子産石と申しまして、小さなのは細螺、基石ぐらゐる、頃あひの御供餅ほどのから、大きなのになりますと、一人では持切れませぬやうなまで、こつとり圓い、些と、平扁味のあります石が、何處からと無くころ／＼と産れますでございます。」

其の平扁味な處が、恰好よく乗りますから、二つかさねて、お持佛なり、神棚へなり、お祭りになりますと、子の無い方が、いや、最う、年子にお出来なされますと、申しますので。

随分お望みなさる方が多うござりますが、當節では、人がせゝこましくなりました。お前様、江戸の壓へにも持つて參れば、二人がかりで、澤庵石に荷つて歸りますのさへござりますに因つて、今が今と申して、早急には見當りませぬ。

随分と御遠方、わざ／＼拾ひにござらして、力を落す方がござりますので、恙うやつて近間に店を出して居りますから、朝晩夕時を見ては拾つて置きまして、お客様には、お土産かた／＼、毎度婆々が御愛嬌に進ぜるものでござりますから、つい人様が御存じで、葉山あたりから遊びにござります、書生さんなどは、

(婆さん、子是要らんが、女親を一つ寄越せ。)

なんて、おからかひなされます。

其を見い／＼知つて居て、此の嘉吉の狂人が、如何な事、私があげましたものを召食らうとするのを見て、石ぢや、と云ふのでござりますよ。」

四

「それではお婆さん樂隠居だ。孫子が嘸大勢あんなさうね。」

と小次郎法師は、話を聞き／＼、子産石の方を覗きたれば、面白や浪の、云ふことも上の空。トお茶注しませうと出しかけた、塗盆を膝に伏せて、不圖黙つて、姥は寂しさうに傾いたが、「何のお前様、此の年になりますまで、孫子の影も見はしませぬ。爺殿と二人切で、雨のさみしさ、行燈の薄寒さに、心細う、果敢ないにつけてまして、小兒衆を欲しがるお方の、お心を察しま

すで、なう、子産石も一つ一つ、信心して進ぜます。

長い月日の事でござりますから、里の人達は私等が事を、人に子だねを進ぜるで、二人が實を持たぬのぢや、と云ひますが、今ではそれさへ本望で、せめてもの心ゆかしでござりますよ。」

とかことがましい口ぶりだつたが、柔和な顔に鞆みも見えず、温順に莞爾して、

「御新造様がおありなさりますれば、御坊様にも一かさね、子産石を進ぜませうに……」

「飛でもない。此の團子でも石になれば、それで村方勸化でもしようけれど、生憎三界に家なしです。」

しかし今聞いたやうでは、嚙お前さんがたは寂しからうね。」

「はい、はい、否、御坊様の前で申しましては、お追従のやうでござりますが、佛様は御方便、難有いこととござります。恚うやつて愛想氣もない婆々が許でも、お休み下さります御人たちに、お茶のお給仕をして居りますれば、何や彼や賑やかで、世間話で、ついうか／＼と日を暮らしますでござります。」

「あゝ、もし／＼、」

と街道へ、

「休まつしやりました。」と呼びかけた。

車輪しやりんの如ごとき大おほさの、紅白段々こうはくだんだらの夏なつの蝶てふ、河床かはどは草くさにかくれて、清水しみづのあとの土つちに輝かんやく、山際やまぎはに翼つばさを廻まはすは、白しろの脚絆きゃはん、草鞋穿わらぢき、かすりの單衣ひとへのまくり手に、其その看板かんばんの洋傘かうさんを、手拭持てぬぐもつ手に差翳さしやすした、三十みそぢばかりの女房にようばうで。

あんべら帽子ぼうしを阿彌陀あみだかぶり、縞しまの襦衣じゆいの大膚脱おほはだぬぎ、赤あかい團扇うちあはを帯おびにさして、手甲てつかま、甲掛かまがけ嚴重じやんじやうに、荷にをかついで續つづくは亭主ていしゆ。

店みせから呼よんだ姥うばの聲こゑに、女房にようばうが一いち寸會釋さんしやくする時とき、束髮たばなみの鬢びんが戰たたかいで、前まへを急いそぐか、其そのまゝ通ほる。前帶まへおびをしやんとした細腰ほそこしを、廂ひがしにぶらさがるやうにして、綻ほころびた脇わきの下したから、狂人きやうにんの嘉吉かきちは、きよろりと一ひと目。

ふら／＼と葭簀よしすを離はなれて、早はやや六七間行過けんかうすぎた、女房にようばうのあとを、すた／＼と跣足はだしの砂路すなみち。ほこりを黄色きいろに、ばつと立てて、擦寄すりよつて、附着くっついたが、女房にようばうの其そのの洋傘かうさんから伸のかゝつて見越みこ入道にようどう。

「イヒヒ、イヒヒヒ、」

「これ、惡戯いたづらをするでないよ。」

と姥うばが爪立つまだつて窘めたしなめたと、笑聲わらひこゑが、殆ど一ほとん所に小次郎法師せうじろうほうしの耳みみに入はいつた。

恰あたかも爾時そのとき、亭主ていしゆ驚おどろいたか高調子たかどうしに、